

年間第十三主日

2019.6.30

ルカ 9・51－62

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高

今日の福音は、エルサレムに向けて最後の道程を歩み始めようとしておられるイエスが、そのみ後について行くことを願い出た人たちに語られたみことばを伝えています。今日の福音のみことばを理解しようとするなら、わたしたちに直接語りかけるみことばとしてではなく、まずは、福音書がわたしたちに語ろうとしてイエスの御生涯のあの時点に身を置くようにして、そこで語られたイエスのみことばとして聞かなければなりません。

イエスにとってエルサレムへの道は何を意味していたのでしょうか。「人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちから排斥されて殺され、三日目に復活することになっている」(ルカ 9・22b)。イエスはエルサレムで待ち受けている十字架の死に極まるご自分の運命の行く手の全てを、父なる神の御旨として受け止め、エルサレムへの最後の道に旅立とうとしておられるのです。今日の福音は、イエスがなされたみわざと、イエスが語られたみことばを、いわば外側から記述してきたこれまでの語り方から一転して、イエスの生涯を決することになった、エルサレムへのこの旅立ちに当たっての、イエスの内面の世界へとわたしたちを導こうとしているかのようです。今日の福音の冒頭の一節は、荘重な響きをもって語られています。「イエスは、天に上げられる時期が近づくと、エルサレムに向かう決意を固められた」。イエスはどのようにしてこのような決意を固められたのでしょうか。

ルカ福音書では、先週の福音の箇所と今日の福音の箇所の間に、イエスの変容の場面が語られています(ルカ 9・28－36)。そこでは、変容の眩しい光の中にモーセとエリヤが現れて、イエスとともに、イエスがエルサレムで遂げようとしておられる最期について話し合っていたと語られています。

今日の福音の最初のことばに戻ってみると、「イエスは、天に上げられる時期が近づくと・・・」と語りはじめられています。福音書記者は、意図的に注意深くこれらのことばを選んで語っているのです。十字架につけられて死に、三日目に復活されるイエスは、最終的に御父のもとに昇天されます。けれども、聖書全体を通して見ると、天に上げられたのはイエスが最初ではありません。御変容の山に現れたモーセとエリヤは、ともに、その生涯の終わりに、神によって天に上げられた人たちです。特に、火の馬の牽く車に乗って炎の旋風の

中を天に上げられたエリヤの物語は、弟子たちにとってもなじみ深いものだったはずですが。エルサレムを目指して進むイエスの一行を迎え入れようとしないうちに、サマリアの人々に対して、変容の場面に立ち会ったヤコブとヨハネが「お望みでしたら、天から火を降らせて、彼らを焼き滅ぼしましょうか」と言っているのも、彼らの脳裏にはエリヤの物語があったことをうかがわせます（王下 1・1-2・11）。エリヤは自分を捕らえようとしてやって来た人々を天からの炎をもって焼き滅ぼしたのでした。

旧約のエリヤ物語を背景にルカ福音書がここで強調するメッセージは、イエスは決してエリヤのように天に上げられたのではないということです。十字架なしには、イエスにとっても、その御跡に従う者たちにとっても、天に上げられる道はないということです。それが、十字架の道を歩まれた主イエスが、その御跡に従う者たちに悟ってもらいたいと思っておられることであるということです。エルサレムでご自分を待ち受けている受難の死を予告されたあとで、イエスが弟子たちに告げられました。「わたしについて来たい者は、自分を捨て、日々、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」（ルカ 9・23b）。

エルサレムへの最後の旅立ちに当たってのイエスの決意を語る今日の福音において、そのイエスのみ後に従おうとする者たちへの招きのことばは、いよいよ切迫した調子を帯びてきます。「あなたがお出でになるころなら、どこへでも従って参ります」と言った人に対して、イエスは、「人の子には枕するところもない」と応えておられます。イエスのエルサレムに向かう旅路は、サマリアの人々に宿を拒否されるころから始まっています。旅の始めに当たってのこの出来事は、エルサレムに向かうイエスの運命を象徴しているかのようです。十字架の前夜、弟子たちと最後の晩餐をともにされたイエスは、弟子たちを伴ってゲツセマネの園で父なる神のみ旨に従い通すために祈り続けられ、そこで捕らえられて、その夜のうちに大祭司のもとに引き立てられて尋問を受け、その翌朝、ピラトの裁判を受けるために引き渡されます。そして、あの十字架の上で最後の息を引き取られるのです。御父のみ旨として、ただただ人々の救いのために生きられ、その生涯を貫き通すために、十字架の死をも甘んじて御父のみ旨として受け止められたイエスには「枕するところ」はこの地上にはないのです。そのようなわたしの行くところに、あなたはついてくる覚悟ができているかとイエスは問うているのです。

イエスのみ後につき従うことを申し出た人に向けられた今日の福音のみことばは、わたしたちをたじろがせます。なぜ、親の葬儀までも差し置いて、愛する人たちへの分かれの暇も与えられずに、イエスの呼びかけに従わねばならな

いのでしょうか。「鍬に手をかけてから後ろを顧みる者は、神の国にふさわしくない」と言われた、今日の福音の最後のみことばの真意はどこにあるのでしょうか。

イエスがガリラヤで宣べ伝え始められた神の国の到来は、エルサレムにおけるイエスの十字架の死によってもたらされるのです。十字架の死に終わったイエスの生涯は、わたしたち全ての者を神の国に招き入れるためにささげられた生涯であったのです。

イエスの十字架の死によって、その先に開かれた復活のいのち、神の国の喜びに招き入れられるためには、イエスに従って十字架の道を歩むことが求められます。けれども十字架の道を進まれるイエスの「わたしに従いなさい」との呼びかけは、今日の第二朗読のガラテヤの教会への手紙の中でパウロが述べているように、決してわたしたちを奴隷のくびきにつなぐ掟ではありません。イエスご自身、あのゲツセマネの園で、父なる神のみ旨としての十字架の死の前に、血の汗を滴らせるほどの苦悩の中から祈りを捧げられたことをわたしたちは知っています。そのような祈りの中で、イエスは、わたしたちがミサの聖変化の時に聴いているように十字架の死に至る苦難を「自ら進んで」引き受けられたのです。ミサのたびごとに、司祭は次のように唱え続けています。「主イエスは進んで受難に向かう前に、パンを取り、感謝をささげ、割って、弟子たちに与えて仰せになりました。皆、これを取って食べなさい。これはあなたがたのために渡されるわたしの体である」。わたしたちがご聖体をいただくのは、わたしたちのために進んで十字架の死に渡された主イエスの愛のいのちに生かされるためであり、わたしたちもまた、進んでイエスの呼びかけに応え、イエスの歩まれた十字架の道に従って歩む力をこの身にいただくためです。

イエスの十字架は外から押し付けられた、理不尽な、意味の見えない苦しみなのではありません。人々のために、人々に代わって、進んで引き受けられた神の愛の苦しみの姿です。その十字架の道を歩み通されたイエスは、今日もこのミサを通して、わたしたちをそのみ後に従うよう招かれています。「わたしについて来たい者は、自分を捨て、日々自分の十字架を背負ってわたしに従いなさい」。ガラテヤの教会への手紙（ガラ 5・1, 13-18）が呼びかけているように、わたしたちの心が本当に自由になって、わたしたちの日々の中で、その日その日、イエスのこの十字架の道への招きに応えることが出来るよう、聖霊の助けと導きを願いたいと思います。